



タンチョウ博士のお話（第22回）

○消えたツル・現れたツル

身の回りに当たり前のようであったものが、時代とともに消えてしまうことは、この世に少し生きた人なら、誰でも覚えがあるでしょう。

たとえば私ごとでは、戦争も終わりに近い1945年、働き手を兵隊にとられて困っている農家のため、中学1年生の私たちも「援農」に出されました。

札幌住まいの私は、白石駅まで汽車（もちろんSL）で行き、農家の方が用意してくれた、少し傾いた平たい荷台の2輪荷馬車にひざを抱えて座り、でこぼこ道を揺られて駅と農家を往復しました。こんな送迎車(?)は、暮らしの中に再び現れることは、まずないでしょう。そして作業は、泥に足を取られながらの、あの腰の痛くなる田植えでした。SL、荷馬車、田植え、このどれもが、今の北海道では幻に近いでしょう。

それでも、お試し程度ならSLや荷馬車を走らせ、はだして水田に入り苗を植える作業は再現できます。しかし、失われたのが野生の生きものだったら、多くは絶望的です。地球をわがもの顔に闊歩していた恐竜は、現在の最高技術を用いても復活できません。ジュラシック・パークは、まさに絵空事です。

さて、長沼町を含む馬追丘陵と千歳川の間低地帯は、19世紀の終わりまでタンチョウの一大生息地でした。しかし、狩猟と、湿地の農地化・宅地化などで暮らしの場を失い、1920年代にはすでに幻の鳥でした。

以後およそ100年間、長沼町はタンチョウと無縁の町でした。

しかし、タンチョウは姿を消したわけではなく、消えかけた残り火のように、道東にポツンと残っていたのです。それに気づいた人々が、燃えやすい細木を添える（餌を撒く）などを続け、大きな炎をよみがえらせました。炎は周りにも広がり、2010年代に1つの火種が長沼にも飛んできました。

20世紀に世界で50種を超す鳥が絶滅し、スピードも増す傾向にあるとされ、日本でも54種ほどが絶滅の恐れが高いとされています。こうしたなか、トキやコウノトリのように人が放鳥したわけではないのに、100年前に長沼町から消えたタンチョウが再び姿を見せたのは、まさに奇跡的と言えるでしょう。

それは頼りなげな1つの火種でした。しかし、「タンチョウを呼び戻す会」を軸に、地域の人々が熱心に見守り、この春には営巣という1つの炎を上げる気配が出てきました。それを進めるには、町の人たちが一体となってツルに関心を持ち、炎が消えないように環境を整え、それをしっかり守るという意思が必要です。

火種はどうやら1つだけではなさそうですが、ともかく炎のぬくもりを感じさせるようなタンチョウの存在と、それを育む自然と、そして私たちの暮らしとの一体感を、これからも長く培ってほしいと心から願っています。(文：正富宏之)



写真：生き物の気配もない冬の舞鶴遊水地
(令和2年1月4日撮影)

お願い：昨年と同じく、番いのツルは厳寒期にこの遊水地にいません。どこかで見かけた方はぜひお知らせください。

【連絡先】役場企画政策係 ☎ 76-8015

Eメール：seisakusuishinka@ad.maoi-net.jp